

令和5年9月4日

南の風特集 男子バスケパリオリンピック出場

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

やりましたね！！ 男子アカツキジャパン パリオリンピック自力出場決定！！

本当に素晴らしい！！ 男子バスケ代表が快挙を成し遂げました。1976年のモントリオールオリンピック以来、48年ぶりオリンピック出場権を自分たちの力で獲得しました。そしてワールドカップ（前世界選手権）史上初めての3勝という成績を残しました。

ワールドカップの試合内容や選手個々の大活躍は、読者の皆さんの方が映像や報道を通して詳しいと思います。そこでこの特集では、男子アカツキジャパンの戦い方をトム・ホーバスヘッドコーチ（以下トムコーチ）のコンセプトを中心に紐解いてみます。

今大会の日本は、5試合平均で83.2点の得点を記録。バスケットボールの1試合40分間では80得点が平均的な目安とされているだけに、攻撃面では及第点の出来でした。ただこれまでの日本を考えるとこれは画期的な数字です。

5戦全敗に終わった2019年の前回W杯では平均66.8得点で、3戦全敗だった2021年の東京五輪でも平均78.3得点でした。対戦相手の違いもあって単純比較はできませんが、今回は八村 塁（ロサンゼルス・レイカーズ）が不在の中、4年前のW杯に比べて平均16.4点増、東京五輪からも4.9点増になったことは、日本の着実な進歩を示しています。特にW杯で欧州勢相手に史上初の勝利を挙げたフィンランド戦では、100点ゲームまであと1歩の98得点で攻め勝つなど、これまで世界レベルの戦いでは見られなかった戦い方で相手を上回りました。

トムコーチの追求するスタイルは、東京五輪で女子日本代表が銀メダルを獲得したときと、基本的には変わりません。男子日本代表のヘッドコーチに就任してから、選手個々の能力、ストロングポイントを見極め、世界で戦うために **3つの柱** を作りました。

①得点効率の良い3P シュート重視の攻撃 ②速いペースでの展開 ③積極的な守備

上記を設定した根本には、世界では日本の選手がサイズ（身長）で不利なこと、一方で小柄であってもスピードで優れる選手が多いことを生かすという発想があります。

今大会のメンバーで言えば、河村 勇輝選手、富樫 勇樹選手ら速さのあるガード陣がペイントエリアにドライブで攻め込み、相手の守備を乱したところで自ら得点を狙うか、マークが薄くなった外で待つシューターへのパスを選択する形が日本の理想とする攻撃でした。トムコーチは以前、「男子は女子に比べてフィジカルが強いから、リムプロテクト（ゴール周辺の守備）が厳しい」という懸念を語ったこともありましたが、このW杯では河村選手のペイントアタックが何度も相手の守備を切り裂き、その速さが世界にも通用することを示しました。

一方で、このスタイルは3P シュート成功率に勝敗が左右される部分が多く、勢いに乗れば強豪を倒せる可能性もあるが、そうでなければ格下にあっさり負ける危うさもあります。

このW杯5戦を通して、日本は3P シュートを1試合平均32.6本放ち10.2本を成功させており、成功率は31.3%でしたが、完敗したドイツ戦は成功率17パーセントに低迷しました。その反面、フィンランド戦では39%の高確率で決め切ったことが勝因の一つになりました。 特集Ⅱへ続けます。